

# 「馬鹿者を命ず！」

## 第三十二回 伊予南フェア始まる その三 渋谷和宏

イラスト ● 丹下京子

**榎太一**（えのき・たいち）76歳、二名島バッテリーの創業者で社長。ビジネスの世界ではカリスマ創業経営者として知られる。

**大渡晴美**（おおわたり・はるみ）45歳、伊予南市長。榎太一の娘。

**中林修**（なかばやし・おさむ）65歳、二名島バッテリーの秘書室長で榎太一の側近。

**シヨーン・次川**（つきかわ）45歳、アメリカの投資ファンド、ヴァインセント・ファンド副社長。

**青山麻衣**（あおやま・まい）24歳、悠太の元カノ。悠太をふっておきながら再び伊予南市にやってきて、悠太の仕事を手伝い始める。

**広岡卓次**（ひろおか・たくじ）49歳、地域おこし協力隊員として伊予南市に移住し、その後伊予南プロジェクトの社員となる。

### 「長

旅、ご苦労だったな」

社長の四分地がデスクから立ち上がり、悠太、喜多嶋、亀田の三人を出迎えた。

かえでも会議室にやって来た。

「準備はいよいよ正念場よ。開催までの段取りを説明するから、ほら、三人ともさっさと座ってよ」

かえでホワイトボードの前に立った。

「石打くんも喜多嶋くんも伊予南フェアの中期についてはしっかり頭に叩き込んでいると思うけれど、亀田くんもいるので念のため改めて確認しておくわ。フェアの期間は再来週の土曜日から二週間よ。長丁場になるから覚悟してね。場所はこのオフィスにほど近い西朱雀地蔵通り商店街。亀田くんは西朱雀地蔵通り商店街のことを聞いたことがあるかしら」

「いえ……」

「おじいさんおばあさんの六本木」と呼

前回までのあらすじ  
伊予南フェアの準備が進むなか、麻衣は「パン焼き工房・まつしま」で結婚式を挙げる堤誠一に、式の様子をフェアの会場でネット配信させてほしいと頼む。新庄に頼まれた悠太は亀田をスタッフとして東京に連れて行く。

ばれる都内では有名な商店街よ。全長約八百メートルの通りに約二百軒の店が並んでいるの。期間中はその西朱雀地蔵通り商店街を文字通り、伊予南市の色で染め上げるわ。八百屋には伊予南市で取れる野菜や果物を、魚屋には魚貝類を、和菓子店や洋菓子店には新たに開発した和菓子、洋菓子を置いてもらい、飲食店でも伊予南市の食材を使った特別メニューを出してもらいます。さらに伊予南市の魅力を伝える情報発信拠点も二カ所設けます。うち一つはこのオフィスよ」

かえでは会議室を見回した。壁には伊予南フェアのイメージ画を描いたボードが数十枚張られている。

「期間中はこれらの準備用のイラストを取り払い、伊予南市の魅力を伝える風景写真を展示します。それから市役所や商工会議所がつくっている観光案内のパンフレットをかき集めて並べます。さらにもう一カ所

は……」

かえでは一枚の写真をホワイトボードに磁石で張りつけた。悠太には見覚えのある仕舞屋の写真だ。

「商店街の中ほどにある、もとは酒屋だった空き店舗よ。西朱雀地蔵通り商店会からこの空き店舗の有効活用について相談を受けて『伊予南市のアンテナショップにしたらどうか』と四分地社長が商店会に提案してくれたの。だったら伊予南フェアでもここを使わない手はないじゃない。そこで期間中、ここにはパネル写真だけではなく大きなモニターも置いて伊予南市の映像を流します」

「それってもしかして……」

「そう、石打くん、あなたのアイデアよ。商店会でプレゼンしてくれた石打くんのアイデアを伊予南フェアでも使わせてもらおうわ。石打くん、『伊予南市の食材でつくった料理をその場で食べられるイート・イン・コーナーを設けて、モニターに流れる伊予南市の風景を眺めながら食事したり、お茶を飲んだりできるようにしたい』とプレゼンで言ってくれたそうね。それをフェアでもやっちゃうのよ」

「でも……どんな映像を……」

「市役所が作った観光ビデオや移住のための誘致用のビデオを流すの」



「面白い映像なのか？」  
四分地が聞いた。  
「いえ……映像はきれいだけれど面白いかと聞かれると、当たりさわがないと言うか毒にも薬にもならないと言うか」  
「だったらバッチリの映像があります！」  
悠太は麻衣の顔を思い出しながら言った。

「伊予南フェアの期間中、七十一歳の……堤誠一さんという方が結婚式を挙げるんです。それでその場所が『パン焼き工房・まつしま』というお店で、そこから見下ろす伊予南市の景色がとてもきれいで『それを見て伊予南に行ってみたいと思う人はきっと増えるはずだ』と麻衣が言っていて



……」

「結婚式の様子をネット回線でリアルタイムで流すのか？」

四分地が聞いた。

「それだけじゃなくて結婚式が終わった後も録画した映像を一日に何回か流すんです」

「それはいいな」

四分地が感心したようにうなずいた。

「そういう映像なら俺もぜひ見てみたい」

「堤さんという方、結婚式の映像を流すのを許可してくれたの？」

かえでが聞いた。

「実はまだ返事をもらっていないんです」

『考えさせてください』ということ。でも麻衣は……僕の元カノは諦めないと思います。彼女のことがだからさつと堤さんから許可をもらはずです」

間違いないと悠太は思っていた。麻衣はそういう女なのだ。

「なるほど……喜多嶋くん、亀田さん、何か質問ある？ さつきからさつと黙っているけれど先に進めて大丈夫？」

「あの……よろしいでしょうか」

亀田がおずおずと手を挙げた。

「八百屋には伊予南市で取れる野菜や果物を、魚屋には魚貝類を置いてもらうということですが、そういう野菜や果物や魚はど

うやって運んでくるんですか？」伊予南フェア準備・運営マニュアル』には『搬入日』としか書かれていませんでしたけれど……」

「別に特別な方法はとらないわよ」

「はあ……？」

「野菜や魚などの生鮮品は前日から当日、それ以外のものは数日前に宅配便で運んでもらいます。それがどうかしたの？」

「どこに届けるんですか」

「それぞれのお店に直接届けるのよ。決まっているじゃない。ただ『スペースに余裕がない』と言う店には、私たちの事務所で品物をいったん預かって当日、手押し車で私たちが運んでいくようにします。亀田さんにも手伝ってもらうかもしれないけれど、いいかしら？」

亀田は「はい」と素直にうなずいた。

「じゃあ先を続けるわね」

「あ……品物の配送はだれが担当するのでしょうか？ 宅配便への連絡とか念押しとか、もし決まっていなければ僕がやってもいいです。そういう仕事、市役所で随分させられて慣れているので……」

「それは俺の担当だ。運送会社とはもう話を始めているよ」

喜多嶋が口を挟んだ。

「どちらの会社ですか？」

「お前、何て顔しているんだ。まるで鬼婆みたいだぞ」

「鬼婆でけっこうよ！ あたし怒り心頭に発しているの。何よ！ いきなりメールを送ってきて『ベトナム政府と本社工場移転』についての覚書を交わした』だなんて……」

「メールを送ったのは俺の親心だよ。メディアに発表するよりも前に、お前に知らせておいた方がいいだろうと思っただ」

「メールの話じゃないの。あたしが怒っているのは移転のことよ。お父さん、あたしたちに言ったわよね。『伊予南市にとどまった方が二名島バッテリーにとって経済的メリットがあるという証拠を見せてくれたら、二名島バッテリーの工場移転を撤回してもいい』と。その約束を反故にするつもり？」

「時間切れだ」

晴美の顔が紅潮した。怒りがさらに沸騰しているのだ。

「あれからまだ一カ月も経っていないじゃないの！」

「清谷でお前たちと会った直後、ベトナム政府から工場を誘致したいと打診があったんだ。以来、ずっと検討、調整を重ねてきて、お互いにとって悪くない話だとの結論に至った。ベトナムは高齢化が進む日本と

「地元のヤマノ運輸だ。それがどうかしたのか？」

「ヤマノ運輸なら担当者も含めてよく知っています。僕、何度も荷物を発注しましたから。今度も僕、何でも手伝います」

「そいつはありがたいな」

喜多嶋がにんまりした。

「あ……ちなみにヤマノ運輸の担当者は何と言う方ですか？」

「白井さんだ」

亀田はその名前を記憶に刻みつけるように小声で復唱した。

「二人ともいいかしら。先を続けるわよ」

伊予南フェアはただ伊予南市の名産・特産を東京に売り込むだけが目的ではなく、伊予南市に人を呼び込むきっかけにしたいとも考えています。具体的には農作物の収穫体験や野山での山菜採り、星空やホタルの観賞、そんな体験旅行を企画して伊予南フェアで募集をかけます。喜多嶋くん、こちらの準備はどうかしら」

「伊予南プロジェクトの広岡という社員が進めてくれていて、少なくとも夏に二つ、秋に二つは企画を実行できると言っていた」

「宿は大丈夫なの？」

「たぶん……いや間違いないわね」

喜多嶋は自信たっぷりうなずいた。

は対照的に平均年齢が約三十歳ととても若い国でね。しかも労働者はおしなべて勤勉だし、優秀な人材も少なくない。人口は九千万人を超え、近い将来、日本を追い抜くだろう。投資対象としては日本よりも、もちろん伊予南市よりもずっと魅力的だ」

「だからとつと出ていくと言うの？ 卑怯な不意打ちだわ」

「卑怯だとは穏やかじゃないな」

榎は苦笑した。

「経営は時間との闘いでもあるんだよ。今回のベトナム政府からの提案を逃してしまつたら、これに匹敵する好条件の案件を獲得するまでにどれほどの時間を浪費してしまうか分からない。その間は伊予南市にとどまることで生じる機会損失が募っていく。そんな愚かな経営判断は私にはあり得ない。いや、いっぱいしの経営者なら誰にとつともあり得ないだろう。お前、そんなところにあつ立っていないで座らないか？」

榎は晴美をソファに座らせ、向かいに腰掛けた。

「もちろん移転までの移行期間はそれなりに設けさせてもらうよ。希望者には岡山県にあるうちの児島物流センターで働いてもらってもいい。実は国内販売を強化するために児島物流センターの増設も一方で計画しているね。もちろん全員を配置転換させ

社長室のドアがノックされた。

榎は顔を上げ「どうぞ」と言いかけたが、それよりも早くドアが開き、秘書室長の中林が困り顔をのぞかせた。いつもの謹厳実直を画に描いたような表情ではなく、眉が八の字に歪み、目が泳いでいる。

「あの……お嬢様が……」

「お父さん！ どういうつもりなの！」

晴美が中林を押しつけて社長室に入ってきた。大股で近づき榎の机の前に仁王立ちして憤懣やるかたない表情でにらみつける。

られるわけではないが、ある程度の雇用吸収力は生まれるはずだ」

「全員は無理だって……まさか残りはリストラするつもり？」

「まあ、そういうことになるな」

「何人？」

「リストラの人数か？ まだ正確には計算していないんでね。五千人になるか六千人になるか、それ以上になるか……」

「ふざけないでよ！」

晴美はまた立ち上がった。

「お父さん、あたしに市長を一期だけ務めて辞めろと言ったの!? 三年目に入ってようやく面白くなってきたのよ！ 二期目、三期目が楽しみだと思っていたのよ！」

「それについては気の毒に思うが、俺には俺のミッションがあるからな。お前もお前で次の選挙では雇用や経済が争点にならないようにうまくやるんだな」

晴美はいましそうに歯噛みした。

「工場移転をいつ正式発表するつもり？」

「まだベトナム政府との間でいくつか調整しなければならぬ問題があるんだよ。それを解決してからだから、おそろしく二、三週間先になるだろうな。その間に関係者には順次、内々に情報を流していくつもりだ。そして正式発表後にはすぐにでも移転準備を始める。来年以降、部門・部署ごとに徐々

に移転を進めて、再来年中には完了させたいと思ってる」

「もう後戻りはできないのね？」

「できないな」

晴美はため息をつき、ソファに腰を下ろした。

「お父さんを一生恨むから」

「そうか」

「恨むだけじゃない。あたしは諦めないわよ。移転を阻止するために法的手段も含めてあらゆる手段を講じるから」

「それも仕方がなからう。阻止するのは無理だと思うがね」

晴美は立ち上がった。

「もう帰るのか？ 久しぶりに夕食でも一緒にどうだ？」

「そんな気分になれるわけじゃないでしょう!?」

晴美がドアへと歩き出す。

「ああ……そうだ、お前、近々、石打くんに会う予定はあるか？」

「たぶんね。伊予南フェアの会場で会うと思うわ」

「この件、彼にも伝えておいてくれるか。少し心残りだね」

晴美は立ち止まり楳を見た。

「彼、面白い提案をしてくれたんだよ。『高齢者を伊予南市に数多く移住させたい。実

現したら二名島バッテリーで雇ってくれないか』とね」

「その心は？」

「石打くんは『そうすれば二名島バッテリーにとって経済的メリットがあるんじゃないか』と言いたかったんだ。彼は私が以前、新聞記者のインタビューに答えて『二名島バッテリーを、電池を生産するモノ作りの企業から、電池を使って人の健康や安全、快適を創り出す企業にしたい。その時、重要視しているのは高齢者だ』と言ったのを覚えていてね。『だったらそのアイデアを高齢者に考えてもらったらどうか』と言うわけだ。『自分たちのことなのだから、よく分かってはいるはずだ』とね」

「面白いアイデアじゃない。お父さんもそう思ったでしょう？」

「まあな」

「その約束も反故にするの？」

「約束したわけじゃない。それに彼の提案は『伊予南市にとどまった方が二名島バッテリーにとって経済的メリットがあるという証拠』とまではいかなかった。なかなか面白かったが、満点だとは言えなかった」

「そう言うわりには何だかひっかかってい

るみたいじゃない」

「そうか？」

「そう見えるわよ」

晴美は楳の顔を覗き込むように見た。

会議を終え、夕食後もしばらく仕事をした後、亀田は居残っている悠太や喜多嶋たちを尻目にオフィスを出て、西朱雀プロジェクトが借りてくれたウィークリーマンションに向かった。

西朱雀プロジェクトのオフィスを挟んで、西朱雀地蔵通り商店街とは逆側にある幹線道路沿いのしゃれた五階建ての建物だ。

部屋は八畳ほどの洋室でベッドとソファセットがあり、狭いながらもキッチンとユニットバスが付いている。

亀田はケータイを出し、番号を押した。相手はすぐに出た。亀田は「協力していただきたいことがあるんです」と言った。

「例の件についてですか？」

「もちろんです」

「聞きましょう」

シヨーン・次川は嬉しそうに言った。「西朱雀地蔵通り商店街から遠からず近からずの場所にある、レンタル倉庫かトラックルームを借りてほしいんです。僕、荷物の届け先を変えたいんです」

次川はすぐに亀田の意図を理解したらしく「わかりました」と言った。

「それから、それらの荷物を買い取ってくれる業者を探してほしいんです」

「なるほど……三十分以内にコールバックします」

次川は言葉通り十五分もかからずに電話をかけてきてトラックルームの住所を伝え、荷物を買取ってくれる業者にも当たりを付けたと言った。

亀田は時刻を確認した。午後八時四十分。宅配便の会社はどこも忙しい。ヤマノ運輸の社員もきつと事務所にいるだろう。

果たして電話口に出た社員は、喜多嶋が教えてくれた担当者の白井に取り次いでくれた。

「あの……私、伊予南プロジェクトの亀田と申します。伊予南フェアを担当している者です」

「ああ！ 亀田さん、市役所時代にいらっしやった亀田さんですよ。その節はお世話になりました」

「覚えていてくれたんですか。それなら話が早いですね。実は伊予南フェアで販売する商品の届け先が変わったんです。これから住所をファクスでお送りしますので、そちらに配送していただけますか」

「承知しました」

「あ……それから配送の件ではこれから僕が窓口になります。喜多嶋があれやこれやで忙しくなってます……」

電話を切った亀田はノートにトラックル



まちおこし特命社員  
石打悠太  
**馬鹿者を  
命ずる**

Kazubiro Shibuya

作家・経済ジャーナリスト

大正大学表現学部客員教授。1959年12月、横浜市生まれ。日経BP社で『日経ビジネス』副編集長、『日経ビジネスアソシエ』創刊編集長、『日経ビジネス』発行人などを務めた後、2014年3月末、独立。1997年に長編ミステリー『錆色(さびいろ)の警鐘』(中央公論社)で作家デビュー。TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。